

陰 茎 平 滑 筋 腫 の 1 例

市立堺病院泌尿器科（部長：児玉 正道）

秋 山 隆 弘

奥 田 敬

児 玉 正 道

市立堺病院中央検査科

花 井 淳

大阪大学医学部泌尿器科学教室（主任：園田 孝夫教授）

佐 川 史 郎

A CASE OF LEIOMYOMA OF THE PENIS

Takahiro AKIYAMA, Noboru OKUDA, Masamichi KODAMA and Jun HANAI
 From the Department of Urology, Sakai Municipal Hospital, Osaka, Japan
 (Chief: Dr. M. Kodama, M. D.)

Shiro SAGAWA
 From the Department of Urology, Medical School, Osaka University
 (Chairman: Prof. T. Sonoda, M. D.)

Leiomyoma of the penis is very rare, and only two cases had ever been reported in Japan.

A 32-year-old man was seen with multiple painless masses in the penis noticed for past 5 years. These tumors were surgically removed and pathohistologically proved to be multiple vascular leiomyoma.

陰茎の良性腫瘍は尖圭コンジロームを除いてはまれなものであるが、最近われわれは陰茎皮下に多発した平滑筋腫の症例を経験したので報告し、あわせて文献的考察を加える。

症 例

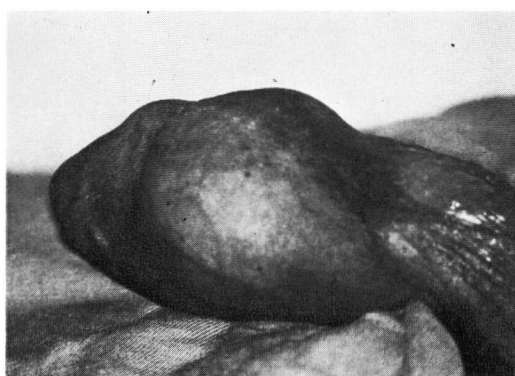


Fig. 1

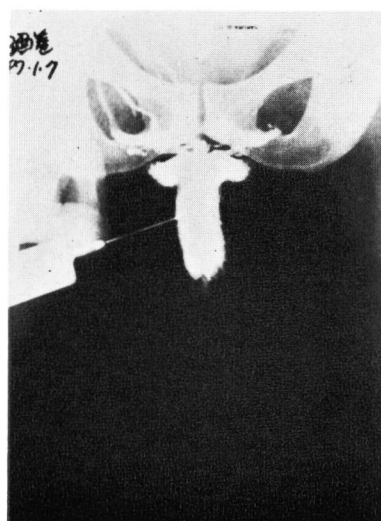


Fig. 2. Cavernogram



Fig. 3

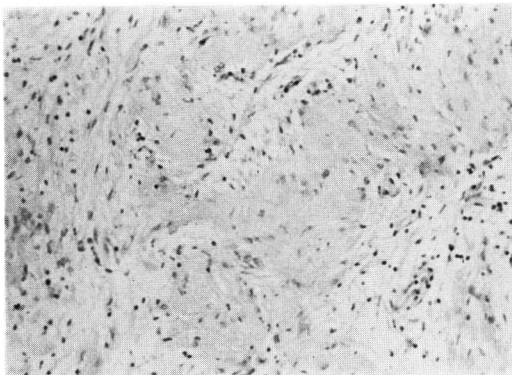


Fig. 6. H-E 染色

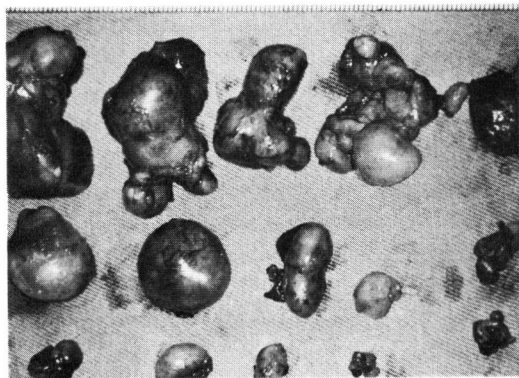


Fig. 4



Fig. 7. 銀染色

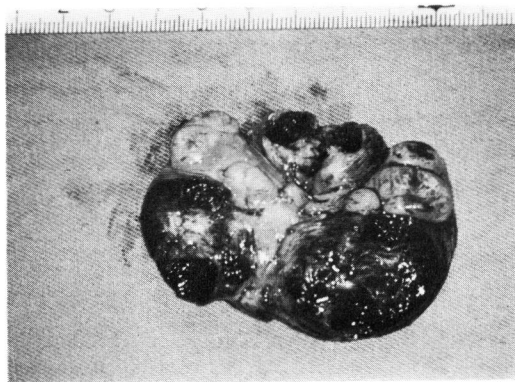


Fig. 5. 剖面

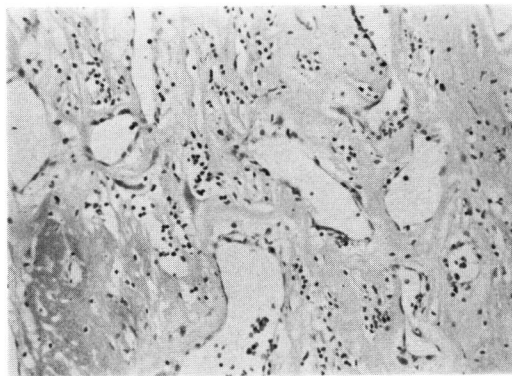


Fig. 8. H-E 染色

患者：32才，未婚

初診：1972年1月4日

主訴：陰茎の腫瘤

既往歴および家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：5年まえ陰茎皮下に小腫瘤ができたが放置していたところ漸次大きくなり多発してきたので，当院外来を訪れた。現在までとくに自覚症状はなく，排尿および勃起も支障はなかった。

現症：一般所見に異常なく，全身リンパ節腫大を認めない。局所所見では，陰茎は包茎で体部から包皮，亀頭部にかけて皮下に種々の大きさの多数の球形の腫瘤を触知する (Fig. 1)。最大のものにくるみ大の大きさがあり，いずれも弾性硬，表面平滑で圧痛，波動を認めず，皮膚および深部との癒着はほとんどない。包皮部にも多数の腫瘤があり包皮を翻転できず外尿道口を露見することは不可能であった。

入院時検査成績：一般検査成績にとくに異常所見はない。尿道撮影は上記の状態で行わず，陰茎海绵体造影 (Fig. 2) で造影剤は海绵体内に容易に注入可能で海绵体の変形はみられない。腫瘍は造影されず海绵体と交通は認められない。

治療：以上の所見より陰茎皮下良性腫瘍と診断し，1週後手術を施行した。腰椎麻酔下に，まず最も大きい腫瘤を摘出し術中凍結切片とし組織検査により平滑筋腫の病理診断を得，悪性所見を認めなかったため，陰茎を保存することとし，腫瘍摘出術を施行した。腫瘍は多数の球形の腫瘤からなり，一部たがいの癒合を認め陰茎筋膜と一部軽度癒着があるほかは周囲と容易に剝離が可能で各腫瘤は平滑な被膜で覆われている。全腫瘤を摘出後皮膚縫合をした。

経過：術後経過は良好で，現在まで再発は認めていない。

摘出標本：大小合わせ30数個あり，総重量は64gであった (Fig. 3, 4)。最大の腫瘤が $4.5 \times 3.5 \times 3$ cm，重量は30g，弾性硬でいくつかの小腫瘤の集合したような形態をとり (Fig. 4)，断面は黄褐色の部分と出血性の赤色の部分からなっている (Fig. 5)。他の腫瘤もほぼ同様の所見である。

組織学的所見：腫瘍の大半を占める充実性の部分についてみると，H-E 染色で Fig. 6 のごとく胞体が好酸性の細胞群として集簇している所と粗に配列している所が不規則な織柄様に配列し，leiomyoma の所見で，細胞密度は低く核に異型がなく mitosis もほとんどなく，良性と判断される。この充実性の所を銀染色すると，銀線維は胞体の中を貫いて走っており平滑筋であることが確かめられる (Fig. 7)。肉眼的に出血のみられた部分の近くでは hemangioma の所見を呈し，血管周囲は hyaline 化した間質にリンパ球の浸潤を認める (Fig. 8)。摘出された腫瘤のいずれを検索しても上述の2つの成分からなり，hemangioma の周囲に平滑筋の増殖した像を呈し，随所に血管壁からの移行を思わせる所見もあり，また腫瘍の被膜への浸潤はみられず良性の vascular leiomyoma と診断した。

考 察

陰茎の良性腫瘍は Table 1 に示すごとくであるが，

Table 1. 陰茎の良性腫瘍

Condyloma acuminatum	Lipoma
Penile horn	Leiomyoma
Keroid	Fibroma
Hemangioma	Mixed tumor
Lymphangioma	Paraffinoma
Sebaceous cyst	

日本泌尿器科全書 (井上) による

Table 2. 報告例の比較

	第1例 (1939 寺井 武)	第2例 (1965 高田千年)	第3例 (1972 自験例)	外国例 (1913 Stavianicek)
年 令	34	56	32	63
経 過	6 年	1 年	5 年	1 カ月
部 位	背 部	背 部	体部・包皮・亀頭	包 皮 小 帯
数	単 発	単 発	多発 (30数個)	多 数 (3 個)
大 き さ	野球ボール大	母 指 頭 大	くるみ大～米粒大	そろめ大 1 個 ピン頭大 2 個
症 状	な し	な し	な し	な し
治 療	腫 瘍 摘 出	腫 瘍 摘 出	腫 瘍 摘 出	亀 頭 切 断
組織学的診断	Fibroleiomyoma	Leiomyoma	Multiple vascular leiomyoma	Multiple leiomyoma

平滑筋腫の症例は本邦では現在までに1939年の寺井¹⁾の例, 1965年の高田²⁾の例の2例の報告をみるのみである。

自験例およびわれわれの調べた外国例1例³⁾を合わせた4例によって陰茎平滑筋腫を臨床的に観察すると (Table 2), 初発年齢は20才台から60才台にわたりとくに好発年齢は指摘できないが, 本邦例ではいずれも初発から受診までに1年ないし6年を要しているのが注目される。好発部位はとくになくどの部位にも発生するようである。単発のことも多発のこともあり, 大きさは米粒大から2~3cm大で, 第1例のように野球ボール大という巨大なものもみられる。自覚症状は全例とも訴えていない。治療方法は外国例の亀頭切断を除き, 本邦例ではすべて腫瘍の単純摘出のみとなっている。

病理学的に陰茎平滑筋腫をみると, 全身皮膚および皮下組織に発生する平滑筋腫の一種と考えられる。Stout ら⁴⁾の分類によると, leiomyoma には皮膚の立毛筋由来の superficial leiomyoma と小血管の平滑筋由来の vascular leiomyoma の2種類があり, 本症例は後者に属する。vascular leiomyoma は単発性, 多発性ともにみられるが, 多発性の場合でも通常全身にわたることはなく, ある一区域に集合して発生するとされている。まれに大きくなることもあるが通常2~3cmを越えない。組織学的には vascular leiomyoma と venous hemangioma は類似し明確には区別

されず, 腫瘍中の平滑筋の量によって決定しなければならない。本症例では hemangioma の周囲に leiomyoma が多量に増殖する形態をとっているので vascular leiomyoma と診断した。

平滑筋腫は組織学的には良性であるが, まれには再発, 転移がみられ臨床的に悪性という場合があると Stout らは指摘しているが, 本症例ではいちおう陰茎は保存し腫瘍の単純摘出を施行しただけなので今後経過を観察する必要がある。

結 語

陰茎皮下に発生した multiple vascular leiomyoma の1例を報告し, 本邦報告例と合わせ臨床的ならびに組織学的検討を若干加えた。

本論文の要旨は1972年2月5日奈良でおこなわれた第58回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

文 献

- 1) 寺井 武：皮泌尿会誌, 46: 85, 1939.
日泌尿会誌, 28: 403, 1939.
- 2) 高田千年：皮と泌, 27: 697, 1965.
- 3) Stavianicek, F.: Zschr. Urol., 7: 635, 1913.
- 4) Stout, A. P. & Lattes, R.: Atlas of Tumor Pathology, Tumor of the Soft Tissues, Armed Forces Institute of Pathology, Washington, 1967, p.p. 58~63.